

抗生剤適正使用のための薬剤業務の見直しに向けて

(¹総合病院水島協同病院 薬剤部、²総合病院水島協同病院 診療技術部、³総合病院水島協同病院 診療部、⁴岡山大学大学院医歯薬学総合研究科) 岡野祥子¹、三宅美恵子¹、竹内慎治¹、李美淑¹、新谷和子²、大西順子^{1,4}、里見和彦³

【目的】近年、薬剤耐性菌の増加は年々深刻になっており、抗生剤適正使用における薬剤師の関わりも益々重要視されている。当院ではカルバペネム系抗生剤・抗MRSA薬の使用届出制、抗生剤長期使用者のチェックを行ってきたが、いずれも薬剤部として積極的な関わりとは言い難い現状があった。そこで抗生剤適正使用に向けて、医師・薬剤師の意識調査を行い、薬剤師の業務改善の方向性を見いだしたので報告する。

【方法】当院に勤務する医師30名、薬剤師10名に対して抗生剤の使用に関するアンケート調査を行い、抗生剤適正使用における薬剤部の今後の関わりについて検討し、業務改善を行った。

【結果】アンケートの回収率は医師63%、薬剤師100%であった。アンケート結果より、用法・用量について、添付文書に従って投与を行っている医師は56%、PK-PD理論による投与を行っている医師は26%にとどまっていた。また、長期投与と考える日数について、47%の医師は14日以上と回答し、21%の医師は7～10日以上と回答した。薬剤師へのアンケート結果より、薬剤師は用法・用量、投与期間のチェックを主に行っているとの回答が多かったが、医師の回答から、薬剤師に対して副作用のチェックにも期待が高いことが分かった。そこで業務改善の一つとして、届出の必要な抗生剤について副作用やPK-PD理論に基づいた用法・用量等を記載したカードを作成、薬剤師全員へ配布し、注意事項を記載したカードを抗生剤払い出し時に添付し、看護師へ注意喚起した。

【考察】今回、アンケート調査を行うことで医師、薬剤師の適正使用に対する投与計画・実行・評価それぞれの問題点を把握することができた。また、薬剤師だけでなく、看護師に対し注意喚起することで、抗生剤適正使用が推進されたと考える。今後、医師への情報提供、患者の病態把握、副作用チェックに重点を置き、抗生剤適正使用に向けてICT担当薬剤師だけでなく、全ての薬剤部員が積極的に関わっていくためにさらなる業務改善を行っていく。